

〔書言字考節用集一〕乾坤洋大海之灘増韻、瀨也、本朝俗用、

〔萬葉集抄三〕なだはなといふはなみなり阿波國風土記云、奈汰奈汰云事者、其浦波立者奈汰等云、たと云はたかき義也、海の面渺々として波たかき所也、

〔東雅二〕地輿波ナミ略中 鳴水とは、その音あるに因れるなり、たとへば阿波國風土記に、奈汰ナミ云者、

其浦波の音無止時、依而奈汰云といふ義の如し、地名に、鳴海、鳴渡などいふが如き、古語にナミと語に同じタといひトといふは并に轉音なり、

〔倭訓栞前編十九〕奈なだ 洋をいふ、仙覺説に、波高の義といへり、されど神代紀にいふ、名門の轉せるなるべし、灘字をよむはあし、

〔土佐日記〕卅日年承平五雨風ふかず、略中とらうの時ばかりに、ぬじまといふ所をすぎて、たなが

はといふ所を渡る、からく急ぎて、いづみのなだといふ所に到りぬ、けふ海に浪ににたるものなし、神佛のめぐみ蒙れるににたり、

〔伊勢物語下〕むかし男津の國むばらの郡あしやの里にゑるよししていきて住けり、むかしの歌に、

蘆のやのなだのゑほやきいとまなみつげの小ぐしもさ、すきにけり、と讀ける、

〔平家物語五〕文がくながされの事

去程にいせの國あのを、津より、舟にて下りけるが、遠江國天龍なだにて俄に大風吹、大波立て、すでに此舟を打返さんとす、

〔太平記二十〕奥州下向勢逢難風事

兵船五百餘艘、宮ノ御座船ヲ中ニ立テ、遠江ノ天龍ナダヲ過ケル時ニ、海風俄ニ吹アレテ、逆浪忽ニ天ヲ卷翻ス、